
魂の血

鳴神 紫貴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魂の血

【Nコード】

N4809P

【作者名】

鳴神 紫貴

【あらすじ】

南の大国アルザルトの少年アーヴィン。

彼が国と家族、そして大陸を救うために奮闘する物語

序章 ートルガーヌのアーヴィン (前書き)

この本は、ファンタジーを愛するあまり書いてしまったものです。
小説を長編で一人で書くのは初めてで、複線とか結末とかを張れて
ないでしょうけれども、読んでやってください!!

鳴神 紫貴

序章 トルガーヌのアーヴィン

その南の大地はアルザルトと呼ばれるようになり、指導者を中心にさまざまな貴族、人々、歴史が生まれていた。

東西南北に分割され、その間を縫うようにいくつかの小国が網羅する大陸の中でも、比較的大きな国となり、王家は途絶えることなく、今に至るアルザルト。

そこに、いくつかの小国の中でここ500年で飛躍的に大きくなりだした、北の国タヌゲルトが
宣戦布告・・・土地を求めてだ。

軍事国家である彼の国は南下を試みいくつかの国を取り込み、とうとう大国アルザルトの淵までも降りてきた。
かくして、二大王国の戦いの火蓋は切って落とされたのである。

3

だがしかし、そんな戦いのなか大陸全体を脅かす、新たな敵が蠢きだした・・・

そんなことは露知らず、アルザルトの貴族、トルガーヌ家では、2人の子供達が騒ぎまわっていた。
トルガーヌ家はだいたいのところ伯爵あたりの地位にある家で、東よりの広い土地を持っていた。

正確には4人の子供が居る家だが、長男と次男は成人の儀を済ませ、二人とも王家に近い女性と結婚している。

残ったのは、明日12歳が終わる息子アーヴィンと7歳の娘ミユリエルのみである。

唯一の男であるアーヴィンは一家のものと同じ暗い灰色の髪であったが、目は誰ともちがう明るい琥珀色であった。

唯一の男・・・と言うのは父親が戦に狩り出されていて、兄達は入り婿となっているからだ。

父親が居ない中豪勢には出来ないものの、幼友達である貴族の子供数人を呼んでの誕生会を控えた今夜は、彼にとって喜ばしいものであった。

しかし、少し浮き足立った屋敷の雰囲気反して夜空には星が浮かばずに、重たい霧がトルガー又邸の周りの林と丘に幕を下ろし、大気は静まり返っていた。

おりしも、嵐の前触れの小雨のごとく唐突に、屋敷の扉が激しく叩かれた。

「夜更けにやってくる客にろくな者は居ない」とつぶやきつつ執事が玄関に向かうのを見て、子供部屋から廊下に少し出たアーヴィンは執事の背中に「早めのプレゼントに決まってるさ！それでもキミはろくでもないといえるのか？」と笑いながら叫んだ。

そのときの彼は、執事の言葉に納得するとは思っても見なかった。

第一章 真夜中の訪問者 (前書き)

いろいろな方の作品を読ませていただいて、撃沈しました。
心がぼろぼろよっ！(笑)

第一章 真夜中の訪問者

「はい。ただいま。」

叩く音に応じ、扉を開けた執事の前には一人の男が立っていた。

「どのようなご用件で？」

先ほどの言葉のかけらも感じさせないようにこやかな対応であるが、男は何も言わなかった。

執事がもう一度問いを繰り返そうとした瞬間、「これを、魂の血を継ぎし者に。」とささやき汚れた長い袋を男が差し出した。

包みに目をやった執事が男に向き直った時、其処には濃い霧が立ち込めているだけだった。

「どうだった？」と階段を駆け上ってきたアーヴィンは、執事の手をしているものを見て「やっぱり僕の予想通りだ！」と言いかけ、「外れたね。君の言ったとおりだ。プレゼントにしては汚れてるもの。」と告げた。

アーヴィンの反応を見た執事は、「自分も何かは判りません。」と包みを主人の居る書斎へと運び出した。

クレナイ
紅色の絨毯の上を滑るように書斎へと歩を進めていた執事がいきなり立ち止まり、自分の方を振り返ったのを見て、アーヴィンは驚いた。

「セス、どうしたんだ？」

執事の名前はセスと言った。

「これは、坊ちゃんもいらした方がいい気がして。」何か心引かかっている・・・そんな人の表情で彼は言った。

自分自身の心の中にも嫌なものが広がっていたが、「言われなくても、こうしてついてきているじゃないか！」といった後に前を走り出した。

その頃、子供部屋に居るミュリエルの背後でそつと窓が開かれた。声を上げる間もなく、夜風が吹きぬける平野の向こうに連れ去られた。

第一章 真夜中の訪問者 (後書き)

うわ〜なんか・・・。

予想通りにベッタベタ(苦笑)

でもでも!結果とか伏線とかいろいろ考えているし!!!

第二章 ―贈り物となくしもの―

その頃書斎にいる主人―もとい女主人のアイリーンは、戦場いくさばにいる夫へと手紙を綴っていた。

扉をたたく控えめな音に、子供の顔を思い浮かべ微笑んだ彼女だが、その瞳には悲しみの色が写っていた。

「入りなさい。」

その声に応じ、アーヴィンと執事が書斎に入った。

その後、説明のちをし出したセスの声を右耳に聞きつつ、棚の本を指でなぞり歩くアーヴィン。

目に付く本を流し読みしていた時、母親に呼ばれた。

彼女の手によつて開かれていく包みの中を見た少年は、思わず感嘆の声を漏らした。

中身は、剣であった。

蝋燭の灯りに淡く乳白色に光る刃はアーヴィンの腕二本分ほど、柄は少年が握るには少しばかり大きく、非常に繊細な美しい装飾が施され、鮮血のような紅玉ルビーが嵌め込まれていた。

「このような物を・・・いったい誰が？」アイリーンは困惑した。

「何処の家の従者とも告げず、家紋も身につけず、名乗りもしませんでした。」

ただ一言『魂の血を継ぎし者に・・・』と。

先ほどの風のように去ってゆきました。

見当も付きません。」

語る執事に主は頭かぶりを振って応じた。

「そう・・・それなら、そもそもアーヴィンに贈られた物かも判らないわ。

私が、保留として預かります。」

すっかり自分の物のように入っていたアーヴィンは不服の声を上げた。

そんな息子の濃い灰色の髪の毛を撫でながら「貴方の物でないと決まっていないから、保留なのでしょう？」と、母親らしい笑みを浮かべて言った。

「それより、妹の所へ行つてあげて頂戴？」

母親の言葉に安堵の息を吐いたアーヴィンは、素直な返事を返し、執事を連れて子供部屋へと向かった。

その部屋は蒸し蒸しとした空気が立ち込めていた。

静かであった大気が、霧、雲と共に夜風となり、窓から不吉に吹き込んでいた。

開け放たれた窓を閉める執事を横目に、妹の寝台トットへと向かった少年は、不意に立ち止まった。

「ミュリエルが、居ない・・・」

門をかけ終えた執事は、少年の口から放たれた、ただならぬ雰囲気
の言葉に、耳を疑った。

その時、燭台の倒れる音が響いた。

セスは失礼しますとだけ伝え、音のした書斎へと走った。

そうして、独り残されたアーヴィンは、独りの恐怖以上に感じる妹
の安否への不安から、一つため息をつき、「しょうがない執事だ。」
と妹を捜し始めた。

洋服を入れる棚の中、机の下、非常時の為の通路の中、寝台の下・

間もなくして、蒼白な顔の母親と、謝る執事の声が部屋の外から聞
こえ、アーヴィンはもう一度
彼^かの言葉をくり返した。

「ミュリエルが居ない。 何処にも。」

希望は、失せた。

第二章 ー贈り物となくしものー(後書き)

わあい!!

やっと続きをかけた!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4809p/>

魂の血

2011年10月8日12時13分発行